

「声だけは ちょっと自信が あったんです」

大西泰斗

(NHK『ラジオ英会話』講師)

数あるラジオ番組の中でも
突出した伝統と人気を誇るNHK『ラジオ英会話』。
英語を学んだ人なら一度は聴いたことのある
番組の講師として多くのリスナーに支持される
大西泰斗氏に、ラジオの魅力と可能性を聞いた。



『ハートで感じる英文法』(2005年、NHK教育テレビ)から現在の『ラジオ英会話』まで、常に第一線で活躍する大西泰斗。

——NHKの語学講座『ラジオ英会話』の講師になられたのは2018年。幅広い世代のリスナーの支持を得て、9年目に入っています。どのようなきっかけでラジオを始めることになったのでしょうか。

大西 僕は2005年からNHK教育テレビの番組(『ハートで感じる英文法』ほか)に出ていたんです。そもそものは『英文法をこわす』という本をNHK出版から出したことがきっかけで

NHKのテレビに出るようになり、付き合いの長いプロデューサーが、大西はラジオに向いていると、勧めてくださいました。

自分がラジオをやるなんて青天の霹靂で、最初はすごく怖かったですよ。『ラジオ英会話』は伝統ある番組ですから、僕になって聴取率や評判がガタ落ち、なんてことになったらどうしようかと。

一方で、昔から声だけはちょっと自信があっ

たんです。妻に、「声だけは自信を持ってい

よ」と言われてきましたので(笑)。数少ない得意分野を、テレビのプロデューサーが見つけてくださったのでしょう。僕は理論言語学者なので、英語を上手になることにそれほど腐心してきたわけはありません。それよりも学習のプロセスを改善したり、新しい考え方を提示することに興味があった。そういう人間だからこそ打ち出せる新機軸があるのではないかとあって、

ラジオの世界に飛び込みました。

聴取率を落とさないために プレッシャーの中で考えた作戦

——テレビと比べてラジオはいかがでしたか？

大西 ものすごくラクになりました。地味な性格なので、人様に顔を晒すのがずっと恥ずかしかったんです。その上、テレビは必ず化粧をするんですよ。これも苦手だったんですが、映りが悪くてもいいので素顔で出ます、というわけにはいかない。一人だけ化粧をしていないと、他の出演者に比べて血色が悪く見えるため、視聴者の気が散るからです。

それからテレビは、カメラマンさんや音声さんはじめ、何十人単位で動きます。打ち合わせ、準備、リハーサル、撮影と、朝から晩まで時間がかかっていたのに比べたら、ラジオはコンパクトにできていて、直接収録に関わるのはパートナー(デイビット・エバンスさん、秋乃ろーざさん)二人を含めた5人だけ。少人数ですから、収録ギリギリまで内容を詰めることができますし、何より顔が映らないから気楽にできています。

もちろんテレビで学んだこともたくさんあり

ました。初日に僕はNGを10回くらい出したんです。NGって、出している本人だけでなく、周りの演者さんの気分も落ち込んでいきます。誰も僕を咎めるようなことはおっしゃらないんですが、空気が重くなっていくのがわかる。厳しい世界だなあと思いました。で、家に帰って自分に何が足りなかったのかを考えると、要するに、少しでもカッコよく映ろうとしていた。そういう雑念ばかりに神経がいついたと反省して、今後一切、カッコつけるのをやめようと決めました。ありのままでいくと腹をくくってから、ラジオに移った今まで、NGをほとんど出していません。

——ラジオを始めるにあたり、以前の番組を研究したり、他の番組を参考にしたりしましたか？

大西 むしろ聴かないようにしました。自分のやりたいことをやるんだ。失敗したらそこまでだ。そもそも僕はラジオをほとんど聴いていなかったんです。旺文社の『大学受験ラジオ講座』を高校生のときに1年間聴いていたくらいだったので、影響されるような番組がなかったということもあります。

そういう気持ちで始めた初期の2、3年を振り返って思うのは、理屈を通そうとしすぎていましたね。理論畑の僕がいちばん得意なのは理

屈なので、たとえば「時制の一致」というのは、こういうふうに考えるとよくわかりますよと、理屈の説明に力を入れていました。

でも、実際に英語をしゃべるために重要なのは、理屈以上に、よく使われるフレーズが出てくるかどうかです。3年間で理屈を説明し尽くした実感もあったので、それ以降は、より多くのフレーズを教材で取り上げることに力を入れました。そうすることで、より本当の英語に近づいたというのでしょうか。包括的で全方位的な英語番組になっていったと思います。

——大西先生といえば、軽妙なオーブンングトークや、パートナー二人との掛け合いを楽しみにしている人も多いと思います。初期の頃からこうしたコーナーはあったのでしょうか？

大西 むしろ初期のほうが力を入れていました。というのは、先ほども述べたように、伝統番組を引き継いだプレッシャーをものすごく感じていたわけです。多くの人に聴いてもらうにはどうしたらいいだろうと考えて、よし、「面白いこと」を言おうと。

もう一つ、『ラジオ英会話』が始まる直前まで出ていたNHKのテレビ番組『ジョブキソ』(『しごとの基礎英語』でも、登場時に面白いことを言うのがルーティンになっていたんです。同じ

いの続きは本誌でござい！